

A I ネットワーク社会推進会議
影響評価分科会
第1回 議事概要

1. 日時

平成28年11月10日（木）15:00～12:30

2. 場所

中央合同庁舎第2号館 10階 総務省 第1会議室

3. 出席者

(1) 構成員

城山分科会長、大屋分科会長代理、三友副議長（A I ネットワーク社会推進会議）、板倉構成員、稲葉構成員、井上構成員、江間構成員、江村構成員、大田構成員、落合構成員、香月構成員、河井構成員、久木田構成員、久世構成員、クロサカ構成員、近藤構成員、榊原構成員、萩田構成員（代理：堀川 株式会社国際電気通信基礎技術研究所知能ロボティクス研究所社会実装プロジェクト主査）、林（秀）構成員、林（雅）構成員、山本構成員、横田構成員

(2) 総務省

武田大臣官房総括審議官、吉田情報通信国際戦略局参事官、元岡情報通信政策研究所長、福田情報通信政策研究所調査研究部長、成原情報通信政策研究所調査研究部主任研究官、市川情報通信政策研究所調査研究部主任研究官、尾川情報通信政策研究所調査研究部主任研究官

(3) オブザーバー

内閣府、経済産業省、情報通信研究機構、科学技術振興機構、理化学研究所、産業技術総合研究所、（一社）産業競争力懇談会

4. 議事概要

(1) 運営方針等

資料1の運営方針（案）の確認が行われた。

(2) 検討の背景及び今後の検討事項

事務局より、資料2に基づき、検討の背景及び今後の検討事項について説明が行われた。

(3) 構成員等からの発表

内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション担当）付 布施田参事官、江村構成員、林（雅）構成員、株式会社野村総合研究所 山本 上級コンサルタントより、資料3-1から資料3-4に基づき、以下の発表があった。

- 「人工知能と人間社会に関する懇談会」(布施田参事官)
- 「人工知能間の交渉・協調・連携による社会の超スマート化
-それぞれの目的の円滑な達成と互恵関係の形成-」(江村構成員)
- 「A I ネットワーク社会の産業モデルと I C T インフラを中心に」(林(雅)構成員)
- 「A I ネットワーク化による影響及びリスクの分析・評価の進め方について」
(山本 上級コンサルタント)

(4) 意見交換

【林(秀)構成員】

- ・ 相互接続性・相互運用性の確保が重要であり、A I ネットワークを流通するデータ形式、プロトコル等について標準化を考えるべきではないか。また、相互接続性・相互運用性の確保に当たっては、技術面だけではなく当事者間の調整の仕組みについても検討が必要である。

【近藤構成員】

- ・ 豊かさや幸せに関する評価指標について確立されたものはなく、この推進会議の成果として打ち出せるとよい。

【クロサカ構成員】

- ・ 分野別評価の分野の区切り方について、A I ネットワークによる最終的な便益を享受する利用者の視点から考えてみてはどうか。既存の産業分野にとらわれることなく、利用者側から分野を考え直してみるものが有益であるものと考えられる。

【榊原構成員】

- ・ 既存の産業構造、ビジネスモデルを前提とすべきではなく、既存の仕組みが変革することを視野に入れながらシナリオを考える必要がある。

【山本構成員】

- ・ A I ネットワークシステムにより、雇用に影響が及び、人間の仕事がなくなるということは従来から指摘されているが、どのような仕事が生み出されるかについては具体的な議論が行われていない。今後の検討に当たっては、各分野において、人間が行う仕事としてどのようなタスクが出てくるのかがわかると、ポジティブな影響が見えてくる。

【板倉構成員】

- ・ 林(秀)構成員の御指摘に関連して、キルスイッチや緊急停止などリスクを下げる方向の仕組みの標準化は相当強く進めていくべきである。また、A I システムがどのような判断をしたのか、行動をとったのかについて、ログを検証できるようにする必要があり、その標準化も検討すべきである。

【江間構成員】

- ・ 例えば「不快」という個人によって度合いが異なるものに対しては、一律に対処することはできないが、影響評価ということであれば、価値の多様性をどのように扱うのか、また、そのようなものに関して社会的な合意が得られる仕組みをどうするのか検討が必要である。

【落合構成員】

- ・ 分野別評価の分野の区分について、複数の分野が融合したときの社会の姿がどのようなものになるのかを検討すると多角的な議論ができる。その際に、具体的なユースケースをもとに議論することが望ましい。

【久世構成員】

- ・ IBMでは、AIは完全に人間に置き換わるものではなく、必ず人間がいて、人間をサポートするものとしている。したがって、AI (Artificial Intelligence、人工知能) という言葉は使わず、AI (Augmented Intelligence、拡張知能) やコグニティブ・システムと呼んでいる。
- ・ これまでの適用事例から、3パターン (Engagement、Decision Support、Discovery) の用途に分類している。Engagementは、ユーザや顧客の対応支援で、コールセンターなどがこのタイプである。Decision Supportは、人間の決定の支援をするもので、医療診断支援がこれに含まれる。Discoveryは、新しい発見の支援で、創薬支援などがある。
- ・ 利用方法や人間の介在方法により、リスクの種類や大きさが異なる。分野別評価の分野を検討する際の参考にしてほしい。

【横田構成員】

- ・ 既に従来の規制が規律しているリスクがあるが、当該規制の在り方により、リスクが減少するものとリスクが増大するものの双方があり得ると考えられるため、リスクのプラス・マイナスの観点からの検討も必要ではないか。

【香月構成員】

- ・ AIネットワークには、社会のインフラに入るAIネットワークと人間と協調するというパーソナルアシスタントとしてのAIネットワークという2つに分けて考える必要がある。
- ・ B to BにおけるAIネットワークの連携が主に議論されているが、個人の研究者・開発者も相当数いるので、C to Bにおける連携も考える必要があり、そこでの影響・リスクを評価することが必要である。

【三友副議長】

- ・ AIネットワークを何のために利活用するのか、利活用の目的、インセンティブ等を考えなければならない。AIネットワークは、中央集権的ではなく、分権的に社会に浸透していくものと考えられ、誰にとっての価値なのかをよく考える必要がある。